

周辺のみどころ

現在の尾上漁港付近には尾上浜遺跡が広がっている。縄文時代の丸木舟や梁の遺構が出土したことで知られるが、奈良時代から平安時代においても、斎串や馬形代、和同開珎などの遺物が注目される。一般の集落から出土することは少なく、官衙遺跡から出土することが多い。

さらに、瀬田の近江国庁と共通する飛雲文瓦を出土する浅井寺遺跡も近隣に所在するなど、奈良時代の尾上付近は、重要な港として認識・整備されていた可能性が考えられ、こうした周辺の遺跡にも見所が多い。



浅井寺跡の比伎多理神社



【アクセス】

●尾上へはJR北陸線河毛駅下車、バス尾上下車。遺跡は琵琶湖の湖底水深70mにあり、通常の間では到達不可能。

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】  
(関連文献/関連施設)

●葛籠尾崎湖底遺跡資料館  
土器類を見学する場合は、事前申し込みが必要。  
申し込み先  
湖北町教育委員会 TEL 0749-78-8309

# 葛籠尾崎湖底遺跡

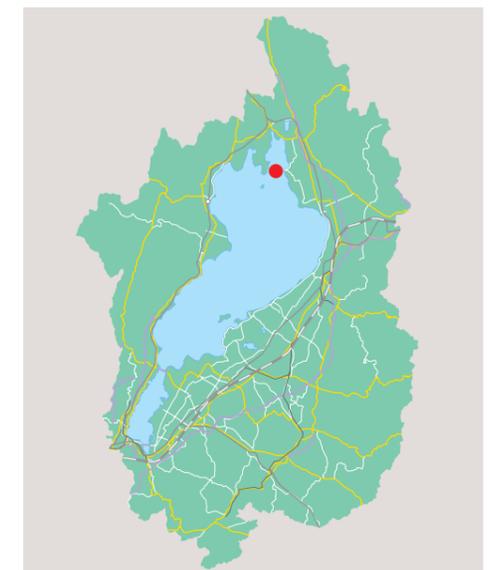
東浅井郡湖北町尾上



葛籠尾崎湖底遺跡の遠望

大正13年の暮、尾上村の漁師が、イサザ網の中から数個の土器を引き上げた。葛籠尾湖底遺跡の発見である。その後も次々と土器が引き上げられ、それは葛籠尾崎の東沖600~700m、水深10~70m付近の湖底に集中することが判明した。

引き上げられた土器類は、いずれも完形に近く、縄文時代早期から平安時代までの長期におよぶ。石器や骨角器が混じることもある。世界的に見ても、他に類を見ない深さに形成された水中遺跡で、まさに琵琶湖の神秘を秘めた、湖底遺跡の代表と呼ぶべき存在である。





今なお湖底に眠る土器

## 葛籠尾崎湖底遺跡

所在地 東浅井郡湖北町尾上

### 小江慶雄先生の業績

葛籠尾湖底遺跡の重要性にいち早く注目し、その研究を生涯のライフワークとしたのが、湖北町尾上出身で、京都教育大学で長く教鞭を執った故小江慶雄氏である。早くも昭和25年に『琵琶湖湖底先史土器序説』を表し、遺跡を学会に紹介し、その後も『水中考古学研究』など、遺跡についての研究を進めた。

また、引き上げた漁師ごとに保管されていた土器類の散逸を防ぎ、地元尾上区（一部は長浜城博物館）で一括して保管されるようになった背景にも、地元の人々の遺跡に対する思いとともに、小江慶雄氏のご尽力が関わっていることである。まさに、水の宝の功労者といっても過言ではない。

### 遺跡の成因

葛籠尾湖底遺跡から引き上げられた土器類は、現在までに約140点を数える。その多くが完形もしくはそれに近い状態で、器壁には

湖成鉄が沈着している。土器の破壊を発生させるような大きな力を伴って遺跡が形成されたものではないことや、遺跡の埋没後はほとんど土砂の堆積がないことを示している。また、水中に没してから、ほとんど移動がなかったとも判断できそうだ。

さらに、湖成鉄は縄文土器では厚く沈着し、一方、土師器などでは薄いという傾向が見てとれる。遺跡が一時に水没したのではなく、年代順に埋没していった可能性が大きいと言えそうだ。こうした状況から見れば、一時の大きな地殻変動で水没した遺跡ではなく、幾度かに分かれて形成された可能性が浮かび上がる。

こうした状況を根拠として、小江慶雄氏は、浸食・地滑り説を提唱したが、土砂の堆積状況など、今少し説明されるべき問題も指摘されている。その他、祭祀説や湖上生活説、船舶遭難説などが提唱されているが、いずれも決定的とはなっておらず、また、長期に及ぶ



潜水調査の状況



縄文時代の注口土器



縄文時代早期の土器

遺跡の成因を一つに限定する方法にも、問題があるのかもしれない。

### 土器の特徴から考える

引き上げられた土器類をみれば、縄文時代早期から平安時代まで、その全期間を通して出土している訳ではない。縄文時代では早期や中期後半などの土器が比較的多く出土し、弥生土器でも中期後半から後期前半のものが多く、また、壺が少なく甕が多いという特徴も指摘できる。

古墳時代前半期の土器も多く出土しているが、その中には河内や大和地方から持ち込まれた土器が含まれており、さらに、比較的少ない奈良時代の土器類では、「都城型」と呼ばれ湖北地域ではあまり見られない甕が複数含まれている。

こうした土器の特徴からみれば、古墳時代や奈良時代の土器類は、一般の集落とは考えがたい様相を示すようで、ここにも遺跡の謎を解く重要なヒントが隠されている。